

気候変動と 中世の政治・社会

榎原 雅治

地 球規模の気候変動が現代社会の重要課題となっている今、歴史学の分野でも気象やそれに起因する災害の歴史への関心が高まっている。もっとも日本中世史で気候変動に関心が寄せられたのは新しいことではない。1976年には山本武夫が中世の日記にみえる花見や降雪の記録によって、平安～戦国期の気温の変動を推定している^①。とりわけ山本の紹介したフェアブリッジの海水準変動曲線(地球規模の海水準の変動を示したグラフ)は中世史研究者に強い影響を与え、温暖な平安期と冷涼な鎌倉～戦国期というイメージが長く続いた。しかしこの曲線は地殻変動を考慮しておらず、気象学の世界ではとうに学術的意義を否定されている。

一方で、藤本久志は文献史料にみえる気象災害記事を集成した史料集を2007年に刊行し、夏の長雨による飢饉の常態化した戦国時代像を提起している^②。膨大な史料情報にもとづいて時代の基底を示した重要な提言といえる。ただ文献史料には記録されやすさや残りやすさの点で偏りが避けられない。自然条件の変動を証明することができる自然科学的なデータが強く望まれるところだった。

自然科学的気象データの登場

歴史学のなかにはいると不可能かと思われた証明だったが、気象学の分野では、今世紀に入って古気象に関する研究が劇的な進展を遂げている。1つは、気候変動に関する国際的な学術組織Past Global Changes (PAGES、事務局スイス)によって復元された、世界各地域における過去の平均気温の変動データである。これは過去の夏の平均気温を樹木年輪幅によって復元したもので、東アジア地域では西暦800年以後の変動の様子が年単位で明らかになっている。もう1つは、総合地球環境学研究所(地球研、京都市)のプロジェクトで明らかにされた過去の夏の乾燥／湿潤に関するデータである。これは樹木年輪セルロースに含まれる酸素同位体¹⁸Oの比率は湿度が高いほど低下する特性を利用して夏の相対湿度を推定したもので、実に過去2600年間の日本国内各地域の変動の様子が、これも年単位で明らかにされている。さらに、この2つの変動データの相関関係は、近代の気象観測データとの比較によって、高温と乾燥(少雨)、低温と湿潤(多雨)が対応することも明らかにされてい

① 山本武夫『気候の語る日本の歴史』(そしえて、1976年)。

② 藤本久志編『日本中世気象災害史年表稿』(高志書院、2007年)。

る③。

このような客観的な数値データによって気候変動がわかるようになってきたことは、各時代の日本史理解にも大きく影響してくる。たとえば地球研プロジェクトのメンバーでもある若林邦彦は、弥生～古墳時代の北部九州や淀川流域における集落立地の変化は降水量の変動と相関していることを指摘している④。すなわち、弥生後期初頭に集落が低地で減少し丘陵上で増加するようになることは以前から知られていたが、これは紀元前後から急激に降水量が増加したことと関連していると考えられる。さらに低地の水田耕作地と集落が分離したことによって、個別経営の社会から集団統合による耕作管理の社会に転換した可能性が指摘されている。気候変動が居住地の移動という直接的な問題にだけでなく、社会システムのあり方にまで影響を与えた可能性がある。

気候変動に関する2つの自然科学的なデータによると、中世の気候はどのようなになっているだろうか。図1は10世紀から16世紀に至るまでの東アジア地域の夏の平均気温と、年輪酸素同位体比の変動を示したグラフである。左軸の数字は20世紀の平均気温との偏差、右軸の数字は20世紀の年輪酸素同位体比との偏差である。酸素同位体比は高い値(湿度が低く、気温が高い方)を下方に表示しているため、2つの曲線は負の相関関係で表示されている。

気温の変動曲線(薄色)からは、1200年代第2四半世紀と1400年代第3四半世紀に大きな低温期があることがわかる。これはまさに中世の二大飢饉、寛喜の飢饉と寛正の飢饉に対応している。この2つの大飢饉の最大の要因は、東アジアをおおった低温状態であったことが数字で証明されたことになる。以下では寛喜の飢饉、寛正の飢饉の実態とその政治的・社会的影響をみていこう。

寛喜の飢饉と御成敗式目の制定

寛喜の飢饉は承久の乱が終わり、鎌倉の武家政権が朝廷を圧倒するようになった時期におきた。寛喜2(1230)年6月、グレゴリオ暦の7月だというのに武蔵と美濃で雪が降った。7月には諸国に霜が降り、8月は大雨大風となった。9月に入ると諸国から凶作の情報が京都に届きはじめた。北陸からは寒気によってイネが立ち枯

③中塚武監修『気候変動から読みなおす日本史』全6巻(臨川書店、2020～2021年)、中塚武『気候適応の日本史』(吉川弘文館、2022年)。

④若林邦彦「集落研究からみた弥生から古墳時代の変化」(古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房、2016年)参照。

⑤田村憲美「自然環境からみる中世社会」(高橋典幸編『日本史の現在3中世』山川出版社、2024年)をもとに作成。

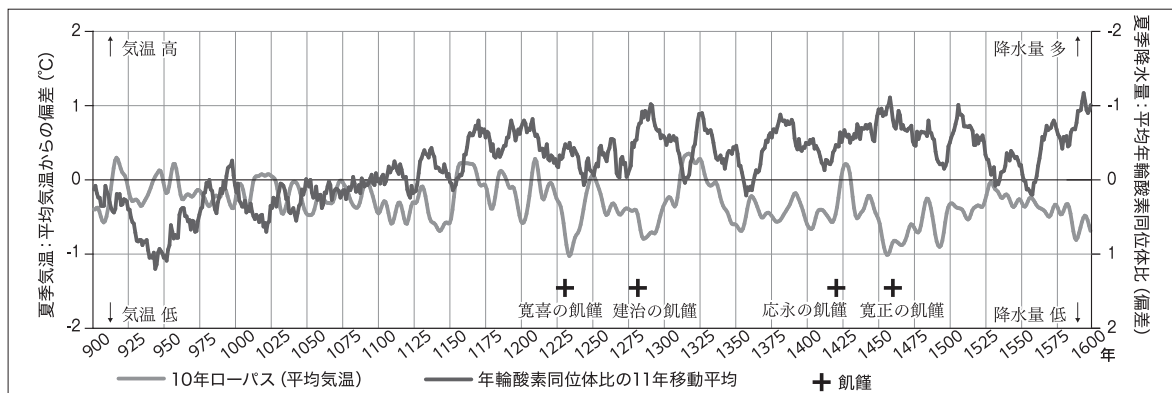


図1 中世の気温・降水量の変動⑤

れたとの報が入っており、低温であるとの気象データと符合している。11月になると一転して暖気となり、麦が実り、タケノコが生えた。庶民はこれら本来春に取れるはずの収穫物を食べてしまったため、翌寛喜3(1231)年の春から夏にかけては食糧が尽き、諸国は大飢饉となった。多数の餓死者が出、京都では死骸が充満した。この年の夏も雨が続き、麦価は米価の4倍に高騰、「天下飢饉、民間滅亡」(『民経記』)というありさまになった。翌貞永元(1232)年、都でも地方でも強盗が横行し、疫病も蔓延するなか、幕府は庶民が牛馬を飼うことを禁じ、麦や秣^{もくさ}を食用に備蓄することまで命じている。

中世社会には、天変地異が発生するのは為政者の徳が欠けているためだとする思想があり、朝廷では神仏の崇敬や儀式の厳格な執行がはかられた。それが「徳政」であると考えられたからであるが、そんなことで飢饉状況が改善するはずがない。年号が寛喜から貞永、天福、文暦、嘉禎と毎年改められたところに朝廷の狼狽ぶりがうかがえよう。幕府の施策はさすがに現実的で、備蓄米の供出や旅人への食糧の提供などをおこなっているが、注目されるのは、幕府自身が禁じていた人身売買を、民の飢饉対応の緊急の策として容認したことである。気候が回復するにつれて、売却した人身の買戻しをめぐる紛争が多発したが、幕府が再度人身売買を禁じたのは延応元(1239)年である。この頃ようやく飢饉状況が改善されたのであろう。

寛喜の飢饉のさなか、幕府はかの御成敗式目(貞永式目)を制定している。かつてこの式目は、北条氏を実質的な首班とする武家政権の安定を象徴する法整備ととらえられていたが、近年は飢饉に対応した徳政の1つとしてとらえる見方が強くなっている^⑥。御成敗式目が裁判の基準を示した法であることはよく知られているが、中世社会には神仏崇敬と並んで、公正な裁判をおこなうことこそが「徳政」という思想があった。その思想にもとづいて定められたのが御成敗式目だと考えられる。具体的な定めにおいても、式目には守護・地頭・御家人と荘園領主の争いについて、守護たちの行き過ぎた行動を抑制する条目が多いが、これは飢饉状況のなかで荘園からの収益をめぐる争いが激化したことを反映していると指摘されている^⑦。とくに42条には逃散した百姓についての規定があり、飢饉下で庶民のおかれた状況を映し出している可能性が高いだろう。

⑥ 佐藤雄基『御成敗式目』(中央公論新社、2023年)。

⑦ 磯貝富士男『日本中世奴隸制論』(校倉書房、2007年)第二部参照。

寛正の飢饉

室町中期、幼少で室町殿となった足利義政がようやく成年に達した頃、気象の変調が始まった。長禄元(1457)年から長禄3(1459)年にかけて、畿内から関東に至る広い範囲で旱魃が続いた。京都の寺社では雨乞の祈禱がおこなわれ、各地の荘園では年貢減免の要求があいついでいた^⑧。

平均気温の変動曲線でみると、東アジア一帯では1450年代初頭から寛喜の飢饉の頃と同レベルの低温期に入っている。日本での状況はそれからやや遅れるようだが、寛正元(1460)年になると、前年までと一転して長雨、日照不足となった。京都ではこの年3月半ばから6月半ばまでの3カ月間に40日も雨が降った。甲斐では4月から7月までの間に3日しか照らなかったという。京都・東福寺の禅僧大極は、6月

⑧ 西尾和美「室町中期京都における飢饉と民衆」(『日本史研究』275号、1985年)。

は寒くてみんな冬服を着ていると日記に書いている。当然、この雨は莊園にも影響をおよぼし、京都桂川西岸の上久世・下久世庄では田が流されてしまった。

翌年正月半ば、京都は数万人といわれる乞食であふれ、同月末には、京都の町は至る所に死体が転がる状態になった。2月、願阿^{がんあ}という時宗の僧が粟粥の施しと死者の埋葬をおこなったが、それで命が助かる者は少なかった。同月末、鴨川にかかる四条大橋から上流をながめた大極は、無数の死体が河水をせきとめ、その腐臭はたとえようもなかったと記している。また、ある僧が木片で小さな卒塔婆84,000枚をつくって、死体一つひとつの上においていったところ、2,000枚しか残らなかったという。地方でも、興福寺領の越前国河口庄では、寛正元(1460)年冬から寛正2(1461)年にかけて、9,000人をこえる死者と700人をこえる流民を出したとされる。

飢饉と戦乱

東アジアをおおった気温低下が寛正の飢饉の大きな要因だったことはまちがいない。しかしそれだけがこの大飢饉の要因ではないだろう。河口庄のある越前では長禄3(1459)年、守護斯波氏の内紛によって合戦がおこなわれ、国内の莊園は蹂躪された。打ち入ってきた軍勢によって作物は刈り取られ、田畠は馬に踏み荒らされた。人々は年貢も納められず、住むことさえも困難な状態になっていた。また河内や紀伊でも守護畠山氏の内紛を端緒とした合戦が展開していたが、寛正元(1460)年の春、大極は京都の街はずれで1人の子を抱え、名を呼びながら泣き叫んでいる女を見かけた。見れば子どもはすでに死んでいる。道行く人が事情を聞けば、その女は「河内の流民だ」と答えた。3年続きの旱魃でイネは実らず、それにもかかわらず年貢の取り立てが厳しく、都に流れてきて乞食をして糊口をしのいでいたのだという。旱魃と低温、それに加えて合戦による食糧強奪。それらがあいまって引き起こされたのが寛正の飢饉だったというべきであろう。

この飢饉の数年後におきたのが応仁の乱である。乱の発生と飢饉には直接の関係はないが、平均気温の変動曲線で興味深いのは、低温状況は飢饉のあとも10年以上続いている点である。応仁の乱が勃発するに至る経緯には、斯波氏や畠山氏の内紛、將軍家の後継者争い、細川勝元と山名持豊の対立、將軍義政の無定見な政務運営など様々な要因があるが、東軍・西軍の両陣営の決定的な対立点があるわけではないのに11年もだらだらと続き、軍事的決着がついたり両陣営の合意点がみつかったりしたわけではないのに、なんとなく終わった不可解な乱であったことが知られている。また、この乱は京都を舞台とした戦いであり、実戦部隊のなかに足軽と呼ばれる軽武装の雑兵が多くいたこともよく知られている。この雑兵の実態が飢饉で故郷を離れ、京都に流れ込んだ人々だったのではないかと、とする考え方が近年では注目されている^⑨。彼らは両陣営の指揮者たちの政治的思惑とは関係なく、傭兵として戦いに参加し、京都市中の寺社や富裕者の居宅を略奪することによって生活の資を求めていたのではないかと、という見立てである。彼らの行動はもはや陣営の指揮者たちの制御の効くものではなく、それが京都での戦いを長引かせてしまった要因だった可能性は高いだろう。

⑨ 藤木久志『雑兵たちの戦場』(朝日新聞出版、2005年)参照。

応仁の乱の根底に京都に流入した飢民の問題があったと考えれば、気温変動曲線はきわめて示唆的である。寛正の飢饉ののち極端な飢饉は知られていないが、科学的なデータによれば、低温状況とそれに対応した多雨状況は応仁の乱中も続いている。それが各地に飢民を生み、彼らの京都への流入を継続させていた可能性が高い。それをふまえるならば、気候変動は寛正の飢饉だけでなく、応仁の乱のあり方にも影響を与えていたと考えることができよう。

気象条件と社会の対応

以上みてきたように、気候変動の実態が自然科学的なデータによって証明されたことによって、日本史上の様々な政治的、社会的な事件を新たな視点からとらえなおすことができるだろう。また平均気温の変動曲線を見ると、13世紀末にも低温期があるが、これは日蓮の説法に語られる建治の飢饉に対応するし、1420年代の高温期は応永の飢饉を生じさせた西日本の早魃に対応しているなど、先に紹介した飢饉以外にも納得できる点が多い。

しかし気象条件を歴史的事件の要因として過度に強調することは慎重であるべきだと思う。先述のように寛正の飢饉には戦乱という人災的な側面もあった。また、同じ降雨の少ない時期であっても、それが渇水をもたらすか、水害の常襲地帯の状況改善と開発の進展をもたらすかは、場所によって異なることも知られている^⑩。かつて開発の進展をうながしたと考えられていた10世紀の高温期も、現在では灌漑設備の整備されない段階でおきた少雨期であり、早魃の連続した慢性的な農業危機の時代ととらえられている^⑪。

さらに近世まで目を広げると、天明年間(1781～89年)が極端な低温期だったことが確認できるが、17世紀後半にもかなりの低温期が続いていたことも知られる。実際に奥羽や北陸では何度か冷害がおきている。この時期(寛文・延宝期)は耕地や人口が拡大し、小農の自立した時期とされているので意外な気がするが、気象上の不利を新田開発によって乗り切ろうとした結果ではないかという見方もなされている^⑫。土木技術の向上や、大量の人員動員力をもつ政権の登場を受けて、新たに開発可能となった原野や低湿地が広がっていたことも幸いしただろう。

気候と政治・社会の関係についての研究は緒についたばかりであり、上述の問題についても異なる見方が出てくる可能性があるが、どんな気候変動がどんな飢饉につながるは、人間社会の対応によって異なってくることは確かだろう。

一方で、弥生時代の人間社会が気候変動の影響をダイレクトに受けていたことも見落とせない。人間側の努力で気候変動の影響を制御できると考えるのは傲りである。現在でも気候変動の影響をそのまま受け入れざるをえない生活者は地球上のどこにでもいるし、まして人間以外の動物たちは気候変動にはきわめてセンシティブである。気候変動データをふまえた歴史理解から考えさせられることは多い。

(えばら・まさはる／東京大学名誉教授)

⑩ 伊藤俊一「一四～一五世紀における荘園の農業生産の変動——播磨国矢野荘を中心に」(中塚武監修『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店、2020年)参照。

⑪ 西谷地晴美『日本中世の気候変動と土地所有』(校倉書房、2012年)参照。

⑫ 平野哲也ほか「近世史の見方はどう変わるか(変わらないか) 時代の概観」(中塚武監修『気候変動から読みなおす日本史1 新しい気候観と日本史の新たな可能性』臨川書店、2021年)参照。